

小さな橋を見つける

連載第5回目



本誌編集委員 植野 芳彦

歩道橋の効用

「小さな橋を見つける」の第5回目の今回は、歩道橋に触れてみたいと思います。技術的な詳しい話は別な機会に譲ることにしています。リラックスしてお読みください。社会资本整備の新たな発想の一助となることを願っています。

道路をまたぐ横断歩道橋は、道路と車の流れを川に見立て、道路の上に架けられた橋です。安全に人々が道路を横断できるようにしたのですが、一時期かなりの数が全国で架けられました。しかし、阪神大震災以降でしょうか？地震の際に倒れると、救援物資輸送等の交通の障害になる。という意見や、近年の財政難、階段を上がりまた降りという不便感から敬遠されるようになり、最近では、だいぶ減ったように思います。

この横断歩道橋を、技術的観点からみると、技術者として横断歩道橋を担当すると非常に勉強になります。基礎工、下部工、上部工、階段



▲小学校の「愛の橋」の壁面

等設計者にとっても非常に多くのパーツを扱わなければなりません。さらに用地やデザイン、人間工学等色々勉強させられます。おそらく橋梁設計のほとんどすべての要素を含んでいると思います。ですから、若い技術者の方は、是非1橋担当してみたいのではないかと思います。

さらに、以下に話すような、地元の方々、先生方の子供を大事に思う心、熱い思いも、こもっているのです。

「愛の橋」が語りかけるもの！

新入生が桜の花の歓迎を受け、希望に満ちて入学して、少し学校生活にも慣れてくる時節になってきました。今回はこの季節を思い、ある歩道橋について触れます。

私の地元、栃木県小山市に羽川小学校という小学校があります。羽川小学校は国道4号沿いにあり、校門も道路側に面しています。登下校の児童たちは日頃、交通事故の危機にさらされていました。そこで通学

班を組織、集団登校する一方、上級生や先生たちが交通指導を行ってきました。この結果、児童の事故は減少したものの、相変わらず国道4号は交通量が増え事故が絶えませんでした（現在は新四号線ができ交通量は減っていますが、やはり朝夕の時間帯は交通量が多い）。当時の桑網町長・菅沼良太氏は次世代を担う子供たちを輪禍から守らなければ



▲「愛の橋」を利用する子供たち

と、学校と協議して歩道橋の建設に踏み切りました（現在の小山市は、この桑網町等複数の町村が合併してできました。桑網町とは、この地区で蚕産が盛んで「結城紬」は実はこの地区での生産量が多かったためです。実は私の実家も元はこの地区にあり、現在も一族が暮らしています）。

昭和37年（1962）5月5日の子供の日。待望の歩道橋が完成しました。当時の金額で工費270万円。長さ14m・幅2m・高さ5mの鉄筋コンクリート製で、手すりと転落防止の金網が張られました。「愛の橋」と名づけられ、供用が開始、日本で第1番目の歩道橋となりました。当時としては画期的な試みでした。現在の歩道橋は2代目になります。「歩道橋」は当時全国でも珍しく、同じような事情を抱える日本各地から視察が殺到したといえます。

実は、今改めて思えば、何の縁か、初代の老朽化した「愛の橋」の調査、診断、解体検討、架替え設計を若かりしころ（確か26歳）の私が担当いたしました。今回は是非と思い、当時の写真を探したのですが残念ながら、初代の「愛の橋」の写真は出て

きませんでした。

以下にこの「愛の橋」にまつわるエピソードを、羽根川小学校のHPから載せます。

学校のすぐ横の国道4号線には、日本で初めて作られた歩道橋がかかっています。この橋は子どもたちの安全を守るため、当時の町長さん（菅沼良太氏）のアイデアで作られたもので、昭和37年の子どもの日に落成しました。町長さんは橋の完成を喜び「愛の橋」と名付け、詩も作りました。そして、親交のあった版画家の棟方志功氏はこの話に感動し、「愛の橋」の詩に自分の絵をそえたといわれています。本校の校長室にはこの作品がかかされており、校庭の池にはそれをきざんだ石碑が建てられています



▲石碑の「菅沼良太元町長」

「愛の橋」の歌発表会 元本校教諭古島先生の回想

羽川小学校に赴任して3年目。待望の1年生を担当することになった。可愛い子供達に心配なことは、交通事故である。不安は2年生になっても続いた。そんなある日、校長室の詩「愛の橋」が目にとまり、曲をつけてこっそり歌っていた。

その頃、たまたま先輩から校長先生が曲づくりを希望すると聞き、子供の歌を吹き込み校長先生に聞いていただいた。全校生で歌ってはどうかということになり、当時間々田中学校長の植野樹郎先生に聞いていただいたりして、2部合唱に仕上げた。そして、発表会となった。その後、下校放送でも流そうということになり、マーチ一用に編曲した。次



▲棟方志功から送られた絵

には、運動会の入場行進曲に使おうと、編曲を始めた。全校生1,000人が入場完了までに7分ほどかかる。演奏も大変である。1分間120のスピードでは、125でやり直し。録音は深夜に及んだ。

運動会のダンスでは「小山音頭」に代わるものをとということが、話題にのぼった。松長先生から早速「愛の橋音頭」の歌詞が届いた。無造作に「こんなのはどう」と手渡された。これが「愛の橋音頭」曲づくりの始まりである。歌詞で心地よく響いたのは「日本最初の橋かけた」である。あとはスイスイと運んだ。どうしてこんなに曲がわいてくるのか。放送室で録音したが、歌ってくれた先生方の声が今でも耳に残っている。振り付けは藤倉チヒ子先生をリーダーに5年生の子供達がつくった。昭和

63年10月の運動会が全員が踊り皆さんへのお披露目となった。こうして、「愛の橋」3部作①愛の橋 ②愛の橋マーチ ③愛の橋音頭がそろった。（引用文献「あゝ一貫学舎 ～羽川小学校120年史～」）

一概に、「橋は無用だ。」「歩道橋は邪魔だ。」という方々が居らっしゃいますが、実はこのように他人を思い、またそれを大事にしている心のこもった「愛の橋」もあることに、気づいてください。



▲2代目「愛の橋」全景（その姿は単なる歩道橋だが・・・）